

<論文>

東アジアのなかの中世日本の貨幣—成果と論点

川 戸 貴 史

要旨

本稿は、近年膨大な研究成果が蓄積されてきた中世日本の貨幣流通史の概要を叙述したものである。主に中国から流入した錢貨を貨幣として受容した中世日本では、15世紀にかけて錢貨が大量に流入し、国家的な主導を経ずに安定的な貨幣流通秩序が形成された。しかし15世紀後半に中国が錢貨の鑄造を放棄したため日本への流入が減少し、16世紀に混乱が生じた。同時期に日本で石見銀山の開発が進み、1560年代には日本でも銀を貨幣として用いるようになった一方、各地で深刻な錢不足に見舞われ、秩序も混乱が続いた。統一政権誕生後は列島規模での秩序の再編成が必須の課題となり、17世紀前半にかけて江戸幕府は自らその整備を進めていった。当該研究では論者によって見解が分かれている論点があり、本稿ではそれらについていくつか指摘して今後の課題を示した。

キーワード

日本史 貨幣史 経済史 海域アジア史 中世史 中近世移行期

1. はじめに

本稿は、近年研究成果の蓄積が著しい東アジア海域交流という枠組からみた日本の貨幣流通史研究の到達点および論点について整理を行う試みとしたい。ここでいう中世とは日本史における時代区分によるものであるが、本稿においては、12世紀から17世紀までのやや広い範囲を対象とする⁽¹⁾。それ以前の日本

⁽¹⁾ 日本の貨幣流通史の概要についてまとめたものとして、[高木2016]が有用である。2019年10月26日に復旦大学（中国）で開催されたワークショップ「世界史の中の東アジア世界」において行った口頭報告の内容を基にしている。当該ワークショップでの

貨幣の歴史については紙幅の都合上説明を省略するが、7世紀後半に朝廷が自ら錢貨を鑄造して用いるようになったものの、10世紀後半にそれを放棄し、その後は主要貢納品であった米や絹布が、貨幣として通用するようになった。このように、日本では自ら金属貨幣を鑄造していながら、その後それを放棄して物品貨幣へ転換（あるいは回帰）していった。金属貨幣から物品貨幣への転換は比較的珍しい現象といえるが、日本においてはこの後にもう一度発生した。後に述べたい。

2. 日本における中世貨幣の成立—14世紀前半まで

日中間の正式な外交は10世紀になると途絶えたが、東シナ海の中国海商による貿易船往復を通じた経済交流はむしろ盛んになっていった。日本では外交窓口であった九州の大宰府の外港である博多に迎賓館と税関の機能を持つ鴻臚館が設置されていたが、10世紀まではこの鴻臚館の管理下で貿易が行われた。中国からは陶磁器や絹織物、書物などが多く日本へもたらされ、多くは京都や奈良の貴族層や大寺社が購入した。日本から中国へは、建築資材として需要の高い材木や、火薬の発明によって急速に需要が高まった硫黄（火薬の原料となる）が主要な輸出品であった。硫黄は九州南方の硫黄島で採掘されたものが主に輸出されていった。このほか、現在の東北地方で採集された金もまた、日本からの主要な輸出品となった。金は貨幣ではなかったが、商取引の決済手段として用いられることもあったようである。日本では貨幣として用いられていれた米もまた、決済手段として用いられ、中国へは食糧品として持ち込まれていた。当時の日中貿易では日本側の輸入超過だったとみられ、10世紀までは、中国から日本への貨幣での決済はほとんど生じなかった。

報告は〔川戸2020〕として中国語で刊行されたが、日本語での発表が当該研究の進展に幾許かの貢献をなしうるものと考え、その後得た知見を加えて成稿したものが本稿である（よって〔川戸2020〕と同一内容ではない）。なお、本稿は2017年度千葉経済大学共同研究費助成による研究成果の一部である。

11世紀に入ると日本の中央権力たる朝廷の地方支配が弱まり、鴻臚館の機能もほぼ停止することになった。その結果、博多では貿易商人による自治のもと貿易が行われるようになった。日本側の窓口であった九州の博多では、中国海商の頻繁な来航の結果、中国海商の居留地である唐坊（チャイナタウン）が形成された。博多では日本商人と中国海商との交易によって大いに賑わうようになったことがわかる。

一方中国では、当時の王朝である北宋は貨幣である錢貨の国外流出に常に悩まされており、国外への持出を厳禁していたが、主に北方への流出が止まらなかった。その結果、錢貨不足を解消すべく、11世紀にはしばしば大量に錢貨を鑄造し、不足を解消しようとした〔黒田2020〕。その結果、北方のみならず海域アジア（東シナ海・南シナ海沿岸地域）への流出も始まった。当然、日本もその一つである。いち早く流入したであろう博多では、発掘調査によって11世紀後半には中国からの渡来錢が少しではあるが流通していたことが確認されている〔櫻木2009〕。しかし、中国での大量鑄造とは裏腹に、11世紀までの日本への流入はわずかだったとみられる。日本では米と絹布の貨幣としての役割が定着しており、日本社会に錢貨が浸透しなかったためと考えられる。

しかし12世紀に入ると、徐々に様相が変わり始める。発掘事例によれば、12世紀前半の九州で銅製経筒が普及し、その発掘事例が多くみられることである。この頃の日本列島では銅の産出が行われていなかったため、経筒の原材料である銅は中国から輸入されたとしか考えられない。実際に、経筒の化学分析が行われた結果によって、原料銅は中国産であったことが実証されている〔飯沼2008〕。12世紀の日本では末法思想の普及に伴って民衆にも仏教信仰が浸透し、経筒のほか各地で銅製の仏像や梵鐘が鑄造されるようになった。これらの原料もまた、中国から流入した銅であった可能性が高い。そしてそれらの銅は、おそらく錢が融かされることによって取り出されていたものと考えられている。

しかし、それでもなお、博多での発掘調査の結果からみれば、錢貨の日本へ

の流入はまだ多くはなかった。銅材料としての需要はあっても、貨幣としての需要が小さかったからである。

貨幣としての需要が高まり、日本へ錢貨の本格的な流入するようになったのは、12世紀後半になってからであった。博多での発掘事例によっても、明らかに発掘事例が増加する傾向が示されている〔櫻木2009〕。文献史料においても、1170年代には京都における錢貨の使用事例を確認することができる。一方当時の中国（南宋）では、貨幣需要が錢貨から紙幣（會子）と銀錠へ変化したため、錢貨の価値が下落したという〔Von Glahn 2010〕。その結果、中国から日本へと向かう中国海商が船の重さを調整するための底荷（バラスト）として、錢貨を用いることが多くなったとみられる。日本から中国へは主に材木や硫黄が輸出されていたが、逆に中国から日本へ持ち込まれるものは陶磁器が主体で、輸出品よりは比較的軽いものが多かった。そのため貿易船の重さのバランスを合わせる必要があり、安価で便利な錢が選択されたというのである〔山内2003〕。供給側からみれば、このようにして錢貨が中国から日本へ持ち込まれるようになっていった。

当時の日本では、なぜ錢貨の需要が高まったのだろうか。実はこれについてははっきりしない。かつては、日中間の貿易（日宋貿易）の活性化によって日本で貿易決済通貨としての錢貨需要が高まったことが指摘されていたが、錢貨は貿易決済通貨ではなく、日中間の貿易はそれ以前から活発であったことが明らかになったため、以上の理由のみでは説明ができなくなった。ただし以前と異なるのは、京都で錢貨が貨幣として用いられるようになったことであり、京都で貨幣として普及したことが流通拡大の重要な契機になったことは間違いないだろう。中国からの輸入品（唐物）の顧客である貴族層や大寺社の需要が急速に高まり、それらを商人から購入するための錢貨を貨幣として保持する欲求が拡大したためであったと考えられる。当時の日本は莊園制の成立期に当たり、彼らには多くの資本が集積されるようになっていった。それが唐物の購買力を高めることになり、また、購入資金としての錢貨を多く蓄えることが可能となっ

たものと考えられる。

一方、朝廷では渡来銭の流通がしばしば問題視された。当然ながら、自らが発行した貨幣ではなかったためである。1190年代に確立した鎌倉幕府もまた、当初は銭貨を貨幣として公認することに消極的だったが、13世紀前半になって容認に転じ、銭貨は年貢の代納手段としても用いられるようになっていった〔佐々木1972〕。

すなわち、日本の中世貨幣は、統治権力が自ら貨幣の秩序を定めたのではなく、民間市場が渡来銭を貨幣として受け入れ、それに権力も追随したのである。また、15世紀前半までは貨幣統制に権力はほとんど関与しなかった。すなわち、市場の自律性によって、日本の中世貨幣は成立し、そして秩序が維持されたのである〔中島圭1999〕。

こうして13世紀の日本では渡来銭が貨幣として浸透していったが、それを支えたのは、当然ながら中国からの絶え間ない供給であった。妥当性について議論になってはいるものの〔Von Glahn 2010〕、13世紀前半に中国北部を支配した金朝がモンゴルの攻撃を受けて滅亡へと向かう中で、金の支配領域から銭貨が大量に日本へ流出した可能性が指摘されている。銭貨を主要貨幣としていた金とは異なり、モンゴルは紙幣や銀を主要貨幣とみなしていたため、モンゴルの侵攻により需要が低下した銭貨が海外へ流出したというのである〔大田1995・2010〕。日本への銭貨の流入は13世紀後半にも引き継がれており、特に1270年代に流入が増加したとされる。その理由は、モンゴル（元朝）が南宋を滅亡させたことによって、南宋の支配領域から日本へ大量に銭が流出したという。ただしこの見解に対しては、同時期におけるモンゴルによる日本への二度の侵攻によって13世紀末まで日中間の貿易が極端に減少しており、その時期の日本への銭貨の流入は考えがたいという批判がある〔榎本渉2007、中村2013〕。そのため、1270年代ではなく、1260年代に南宋から日本へ銭貨が流出したとする見解もある〔Von Glahn 2010〕。1260年代の南宋では幣制改革が行われたがそれに失敗し、銭貨への信用が崩壊したためだという。このように、13世紀後

半の中国から日本への錢貨の移動については、そのメカニズムをめぐってまだ不明な点も多く、現在も議論が続けられている。

14世紀に入ると、元朝による海域アジア交易に対する規制は徐々に弛緩し、日本との往来が再び盛んになった〔榎本渉2007〕。その実例の一つとしてよく知られているのが、朝鮮半島南東沖で発見された、1323年に慶元（寧波）を出航して博多へ向かっていたと思しき沈没船（新安沈船）である。この貿易船には、莫大な数の陶磁器のほか、仏具などの金属製品、東南アジア産の香木（紫檀）、香辛料などが舶載されていた。そのなかに、推定800万枚（28トン）の錢貨が積載されていた。このように、14世紀にかけても中国から日本へ大量に錢貨が持ち込まれていた決定的な証拠となっている。14世紀半ばになるともはや日本では米や絹を貨幣として用いることはなくなり、ほぼ錢貨のみを貨幣とする社会が成立した〔松延1989〕。このようにして中世日本の貨幣流通秩序は、中国との活発な経済交流によってはじめて成立したのである。ただし、当時中国で貨幣として流通していた銀や紙幣は、日本では普及しなかった。

3. 地域権力と地域経済圏の登場—14世紀後半から16世紀前半まで

14世紀後半に中国で元明交替に伴う混乱が起きると、状況が変わり始めた。1368年に成立した明朝は東シナ海沿岸部の海賊行為（倭寇）鎮圧を度々日本に要求したが、日本においても南北朝内乱の影響で室町幕府は九州の諸勢力を統制できず、倭寇鎮圧へ乗り出すことが難しかった。しかも明政府内で倭寇勢力への同調者が出たとの疑いが生じたため、明朝は私的な海外渡航を一切禁止し（海禁）、一度は冊封を成立させた日本（南朝方勢力である征西府）との断交に踏み切った〔檀上2013〕。中国から合法的に日本へ錢貨が流入することは極めて困難となった結果、日本では錢不足に陥ったとみられ、京都における土地価格の下落がみられるようになった〔松延1989、脇田1992〕。また、錢不足を補うための模铸（偽造）も行われたとみられる。博多の発掘調査の結果をみても、14世紀後半の錢貨の発掘事例がほかの時代に比べても少ないことから〔櫻

木2009]、実際に中国からの流入が減少したことは間違いない。

しかし、1392年に室町幕府による南北朝合一して日本の政権基盤が安定し、そして同じ年に朝鮮王朝成立が果たされると、東シナ海における治安維持活動が奏功するようになり、倭寇による略奪は徐々に減少していった。明朝においても靖難の変を経て永楽帝が即位すると、日本では足利義満が冊封を受け入れることによって日明外交が成立し、冊封に基づく交易（朝貢貿易）が行われるようになった。この頃日本では硫化銅からの銅精錬技術が伝わったことで銅の産出が復活し、中国へ輸出するまでになった。一方の中国は銅不足が慢性化しており、錢貨の铸造も日本の銅が用いられたとする指摘もある〔橋本2011〕。ともかくも、15世紀初頭に永楽帝は比較的多量の錢貨（永楽通宝）を铸造させており、うち数万貫文が公的ルートによって日本へもたらされた⁽²⁾。その後1430年代にも、宣徳帝が铸造させた宣徳通宝もまた、数万貫文が日本へ渡った。

中国から日本への「錢の道」は、ほかにもあった。同時に琉球でも中山国による統一が果たされて明朝との冊封が成立し、日本よりも往来が活発となった。その結果、琉球を経由して日本へ錢貨が流入するルートも生まれた〔橋本1998〕。琉球ルートによる日本への錢貨の流入量を見積もることは史料的制約があり難しいが、合計で数万貫文あったと見て差し支えないだろう。

しかし、これだけの量では当時の日本経済を十分に支える流通量だったとは言い難いものだっただろう。15世紀に入ると米価は徐々に上昇したが、これは貨幣の流通量が増加した影響よりも、日本において気候が寒冷化して災害も多発したことによって食糧需給が逼迫した影響の方が大きい〔伊藤2021〕。日本における貨幣不足を完全に解消することはできなかったが、物資供給の悪化によって錢不足による混乱を結果的に食い止めることになったと考えることができる。

⁽²⁾ ただし永楽通宝の铸造がいつ始まったか、そして日本へいつ流入したかについては、今後も議論の余地がありそうである。その点については別稿を用意している。

しかし15世紀後半になって中国と日本の政治情勢がともに不安定化すると、貨幣流通秩序も混乱を始めることになった。明朝では国内において紙幣(宝鈔)の導入を志向したため、錢貨の鑄造が極端に縮小した。しかも15世紀半に紙幣を徴税対象とした政府の紙幣回収政策が破綻した。結局、紙幣への信用が低下して価値が暴落し、市場に忌避されてしまった。替わって高額決済の場面では、貿易決済通貨にもなっていた銀が、主要貨幣として流通するようになった〔大田2001、檀上2013〕。

ただし銀は庶民にとっては高額なため、小額貨幣としての錢貨への需要も根強かった。しかし明朝は錢貨の大量鑄造に踏み切らなかつたことや、北元との紛争に伴う兵卒への給与に錢貨を用いたため、特に経済が活発な江南デルタや華南沿岸部(浙江・福建・広東)で錢不足が深刻になった。その結果、市中における模鑄(偽造)が横行するようになった。代表的な鑄造地は、江南デルタのほか、密貿易の拠点だった福建の漳州だった〔黒田2020、大田2021〕。模鑄錢は北京にも流入したため、1450年代にはその選別(挑揀)によるトラブルが頻発するようになった〔大田1997・2021、足立2012〕。しかし明朝が錢貨の追加供給を一切行わなかつたため、歴代王朝の正規の鑄造錢(制錢)の約半分の価値で模鑄錢も次第に市場に受け入れられていった。

供給元である中国の錢貨流通秩序の変化は、当然ながら日本にも大きな影響を及ぼすことになる。15世紀後半の中国における慢性的な錢不足の結果、銀に対する錢貨の価値が日本よりも中国の方が高くなったのである。また明朝の錢貨鑄造停止によって、朝貢貿易における錢貨の下賜も停止したため、幕府が再三要求したにもかかわらず、公的ルートによっても錢貨が日本へ流入することはなくなった(錢貨下賜の停止は、琉球に対しても同様であった)。しかも銀に対する錢貨の実勢相場が中国の方が高くなったことによって日本へ錢貨を持ち出しても利益が生じないため、少しは存在したであろう密貿易によって中国から日本へ錢貨がもたらされることもなくなったと考えられる〔中島楽2012〕。むしろ、逆に日本から中国へ錢貨を輸出する方が利益が出る状況になったこと

から、1470年代には日本から琉球へ銭貨を持ち出そうとする動きもみられるようになった⁽³⁾。

一方の日本では、1467年に勃発した応仁の乱によって、列島で内乱状態に陥った。銭貨の日本への流入が停滞した上、日本から中国へ銭貨が流出するようにもなったため、1470年代以降は日本列島で銭貨が不足するようになっていった。加えて内乱による社会の混乱によって流通秩序も動揺していった。銭不足を補うための模鑄銭製造も京都や堺などの都市で行われるようになったが、中には粗悪銭や文字のない無文銭も含まれていたとみられることから、銭貨の品質格差が徐々に目立つようになっていった [小葉田1969]⁽⁴⁾。

日本では北宋銭や明銭のそれぞれの銭種を区別せず一枚を一文として使用する秩序が12世紀以来定着していたが、上記のような品質格差が目立つようになったため、戦乱による社会不安も相まって、よりよい銭を選び取って保持しようとする動きが人々の間で急速に広まっていったと考えられる。

また、それまでは京都に集住していた各地の守護は、戦乱によってそれぞれの任国（領国）へ帰還し、拠点となる都市（城下町）を形成していった（朝倉氏の一乗谷や大内氏の山口など）。城下町を政治・経済の中心とする地方都市の形成が日本各地で促進され、それを支配する守護は、独自支配を行う領国を形成する地域権力（戦国大名）となった。その結果、領国単位で地域経済圏が形成されることになり、その経済圏ではむしろ物流が活性化して貨幣需要が局地的に高まる現象をもたらした [鈴木敦2000、川戸2008]。

元々貨幣を鑄造してこなかった日本の権力には貨幣需要を補う能力や意欲が乏しく、その供給は日本の市場（主に都市の商人）が自発的に担うことになっ

⁽³⁾ 文明3年（1471）11月に幕府中枢の細川氏関係者から薩摩の島津氏に充てて、銭を積んだ船を発見したならば抑留し、銭を没収して京都へ送り返すよう求めた書状が残っている（『島津家文書』279） [橋本1998、川戸2017]。

⁽⁴⁾ なお、15世紀後半の日本は政治的な混乱にも拘わらず貨幣需要が依然として高止まりしており、それは底堅い経済成長によるものとする意見がある [大田2021]。興味深い見解であるが、その当否は今後の議論が俟たれる。

たとえられる。しかもそれは日本全体で統一的なものではなく、各地でそれぞれ異なる需要に応じて銭貨（模鑄銭・無文銭）が供給されたと考えられる。このような銭貨は、中国華南沿岸部と同様に特定の商圈（地域経済圏）に限定して流通したもので、地域貨幣と呼ぶべきものであった。一方、隔地間の交易においては、中国では銀が決済通貨として用いられたが、日本では銀ではなく制銭（精銭）がその役割を果たすことになった。15世紀末から16世紀前半にかけての大内氏領国（周防・長門・豊前・筑前）では、「清銭」（精銭）と「並銭」（模鑄銭など）がそれぞれ異なる価値で流通するようになった（前者が後者の3倍の価値を有する）[本多2006]。

すなわち15世紀後半の日本においては、銭種ごとにそれぞれ異なる役割と価値を持つ銭貨が同時に流通する貨幣流通秩序が、市場の主導によって生み出されることになった。その結果、撰銭をめぐる市場取引や納税の場でトラブルが頻発するようになり、1485年に大内氏は撰銭令を發布して統制を図ることになった。なお、この撰銭令では明銭の永楽通宝と宣徳通宝の使用を強制し、洪武通宝の排除を命じている点に特徴がある⁽⁵⁾。中国における明銭忌避が日本へ伝わった影響によるものとする説もあるが、おそらく直接の関係はないだろう。北宋銭に比べて新しい明銭は、流通実績が短いために信用が大きくなかったことや、比較的新しいために偽造を疑われやすく、それゆえ市場では忌避されがちだったのではないかと考えられる。

ところで、各地で形成された地域経済圏は、圏内ですべての物資を自給できるわけではなかったため、必ずしも排他的な経済圏だったわけではない。内乱を経た後においても、京都は日本の経済的中心としての卓越性を維持しており、技術水準の高い実用品（刀剣や甲冑など）の一大生産地として存在していた。また、京都や奈良に構える大寺社のいくつかは依然として各地の荘園を経営しており、米などの生産物に止まらず銭貨を年貢として徴収していた。それゆえ、

⁽⁵⁾ 「大内氏掟書」61・62条 [佐藤・百瀬・池内編1965]。

各地で独自の貨幣流通秩序が形成され、それらの銭貨が地域をまたいで京都へ流入することもあった。その結果、京都では各地から流入する銭貨の価値をめぐって混乱が生じることになる。

一例を挙げると、1480年代以降の賀茂別雷神社（上賀茂神社）では、能登国土田荘から納入された銭貨に「悪銭」（実際には、精銭より価値は低いが流通していた銭貨）が混入するトラブルが度々生じており、後には納入請負業者である土倉と「悪銭」をめぐって訴訟沙汰になったことがある。以後1510年代頃にかけて、各地の荘園から京都へ納入された銭貨の中に「悪銭」が混入するトラブルが発生しており、年貢納入を請け負う代官などは「悪銭」排除を誓約するよう領主側が求める事態にもなった〔川戸2008〕。京都を支配する幕府もついに貨幣流通秩序の統制に乗り出さざるをえなくなり、1500年には初めて撰銭令を発布した⁽⁶⁾。以後1560年代まで度々発布されることになった〔高木2010、千枝2014など〕。

16世紀に入ると各地の戦国大名権力がいよいよ権力を強化し、分国法など独自の法制度を敷いて領国経営を行うようになっていった。貨幣流通秩序もまた、各大名らによって独自に統制されるようになり、日本列島各地でそれぞれ異なる貨幣流通秩序が形成されていった。一方で中国からの銭貨の流入は1510年代までは低調で、銭不足に伴う混乱が続き、京都では頻繁に撰銭令が発布された。東寺領荘園では、この時期に年貢銭への「悪銭」混入をめぐってトラブルが深刻化し、一部荘園からは特産品である漆や紙の現物納へと転換することもあった〔川戸2008〕。

しかし1520年代になると、状況が変化した。言うまでもなく石見銀山の開発である〔本多2015など〕。すでに国際決済通貨でもあり、中国においても貨幣として普及していた銀が、突如として日本で大量に産出されることになった。日本ではすぐに銀が貨幣とはならなかったが、それゆえ中国よりも日本の銀は

⁽⁶⁾ 「室町幕府法・追加法」320条〔佐藤・池内編1957〕。

銭貨に対して安かったため、密貿易のリスクを顧みず中国の密貿易商人が日本（九州北部）へ度々密航するようになったと考えられる。

石見銀山は博多商人が開発を請け負っていたことから、博多が日本側では銀の主要取引所となったが、摘発を恐れる密航者は、西方の松浦・平戸を貿易拠点とするようになった。この地域を支配する松浦氏が手引きしたためであろう。1540年代以降になると、東南アジアからマカオ経由でポルトガル人商人が銀を求めて九州へ来航するようになった。石見銀の登場により日本へ来航する貿易船の数も増加したとみられるが、日本へは以前と同様に中国や東南アジアから陶磁器や絹織物、香辛料などが主に持ち込まれた。1543年のポルトガル人商人の来航によって日本に鉄炮が伝わると、火薬の原料となる硝石や鉄砲玉の原料となる鉛も多く持ち込まれるようになった。

そして、銭貨も再び中国から持ち込まれるようになった。石見銀は多くが華南沿岸部へ持ち込まれることになり、当地では銀に対して銭貨の価値が下落した。一方日本では銀の需要が低く、不足気味であった銭貨の価値は相対的に高止まりしていた。その結果、銀建てでは日本が中国よりも銭貨の価値が高くなったのである [中島楽2012]。つまり、中国から日本へ銭貨を持ち込むと利益が生じるようになった。そこで貿易商人たちは華南沿岸部で流通していた銭貨（模鑄銭）を日本へ再び輸出するようになった。このような状況は海禁が弛緩して密貿易（つまり倭寇）が横行し、業を煮やした明朝が武力討伐に乗り出した1540年代後半がピークだったようで、この時期には再び日本へ多くの銭貨が流入し、日本の銭不足が多少緩和したとみられる。実際に1530年代は日本での撰銭令発布事例がなく、1540～1550年代についても事例は2, 3に止まっている。日本における発掘事例によっても、この頃に埋められたとみられる北宋銭は、精査の結果大半が模鑄銭だったことが判明している。華南沿岸部で鑄造されたものだろう。

4. 「倭寇的状况」と日本の銭貨—16世紀後半から17世紀前半まで(1)

しかし日本の一時的な銭不足緩和は長くは続かなかった。その背景にはやはり海域アジア情勢の変化が影響している。1550年代に最盛期を迎えた嘉靖の大倭寇は中心人物王直の処刑によって沈静化へと向かい、1560年代に明朝が倭寇を制圧あるいは懐柔することによって、日本への密貿易が再び減少へと向かった。そして明朝は1567年に密貿易の漳州海澄県での東南アジア方面への私貿易を許可し、海禁を緩和する政策へと転換した。ただし日本への渡航は引き続き禁止された。日本への密貿易は続いていたようだが、その数は減少したと考えられる [中島楽2011]。1570年代以降の九州ではポルトガル船の来航は続いたものの、中国船の来航は目立たなくなった。すなわち、中国から日本への銭貨の流入が再び低調になったのである。

このインパクトはすぐに日本に及んだ。1560年代に入ると米価格が下落するなど、再び京都周辺で銭不足の影響が生じるようになった [黒田2020、川戸2021]。この頃になると正規鑄造銭である精銭は供給の停止によってほとんど市場から消滅し、主に模鑄銭からなる、精銭よりも価値の低い銭が通用銭として流通していた。1560年代後半になるとそれも不足するようになり、特に高額取引における現金決済に著しい支障が生じるようになった。そこで、銭貨に替わる通貨として金や銀が日本国内においても用いられるようになった。実は九州では貿易の活性化を背景に1550年代には各地で銀が貨幣としてすでに用いられていたが、京都では1568年以降に使用が確認できる⁽⁷⁾。以後、京都では金と銀がともに貨幣として使用されたが、銀の方が使用頻度は高く、1590年代には銀が主要な高額貨幣として定着した。

⁽⁷⁾ 金の事例は、『言継卿記』永禄11年(1568)3月27日条に、「自坂本香取所八木新右衛門来、対面、御装束之手付に黄金二両且渡之、則小川与七郎召寄渡之、二貫四百之分也」とある。銀の事例は、永禄12年(1569)3月16日に織田信長が京都で発布した撰銭令に、唐物等の支払いに銀を用いることを許可した条文がある。それ以前から銀が貨幣として用いられていたことになる [佐藤・百瀬編2001: 687号文書、浦長瀬2001、中島圭2004、藤井2014、高木2017、川戸2017]。

一方、1568年9月に上洛を果たした織田信長は、翌年2月に京都で撰銭令を發布し、銭貨については2枚・5枚・10枚でそれぞれ1文とする銭種を規程し、1枚1文とする精銭とを取り混ぜて使用することを命じた〔佐藤・百瀬編2001：685号文書〕。京都では精銭のみでは貨幣流通を維持できず、すでに流通していた通用銭のレートを定めてトラブルを回避するための法令だったが、市場では遵守されず即座に死文化してしまった。1570年代に入ると京都周辺では精銭が市場から払底し、小額決済にも支障が生じたため、安価で品質の安定していた米が貨幣として用いられるようになった。これが、10世紀以来2度目となる現物貨幣への回帰現象である。ただし10世紀と異なって価値の低い通用銭の流通は以後も続き、米と同時に流通した。これらの銭貨は精銭の3分の1の価値で流通し、ビタと呼ばれるようになった〔本多2012、桜井2017〕。

銭貨流通秩序の動揺によって価値尺度としての機能にも支障を来したため、織田信長やそれを継承した豊臣秀吉は、年貢収取や軍役の基準を銭建て（貫高）ではなく米建て（石高）に徐々に転換していった。これが近世日本税制の基礎となる石高制の出発点となる。

京都よりさらに東方の関東では、銭不足がより深刻な形で襲った。1550年代には既に慢性的な銭不足となり、精銭と価値の低い通用銭が同時に流通していたが、1568年には精銭が払底し、年貢を銭貨で徴収していた大名の北条氏は米や金などの代納を認めざるをえなくなった。1570年代には通用銭も不足し、北条氏は各種支払いに米を充てるようになった。京都と同様に高額取引に特に支障が生じたが、関東では銀ではなく金が主に用いられるようになった。その理由ははっきりしないが、東日本では金山が比較的多かったことが背景として想定されている。一方、関東の北条氏領国では、1570年代以降は新たに精銭は「永楽銭」と呼ばれるようになり、永楽銭は払底した精銭の2倍、後に3倍の価値で使用するようになった。通説ではその他の通用銭は精銭よりも低い価値で流通したとみており、また永楽銭はその名称から永楽通宝のみを指すとする。実際に関東での発掘事例では永楽通宝の比率が他地域よりも高いことが、その根

拠として示されている [中島圭1992、鈴木公1999]。

しかし、比率が高いとはいえ関東における永楽通宝の出土銭全体に占める比率は20%程度であり [鈴木公1999]、永楽通宝のみを精銭と規定すれば、たちまち市場から払底する可能性が高い。また、当時の北条氏関連史料をみても、永楽銭とほかの銭貨（通用銭）を同時に使用した例はない。そのことから、筆者は、永楽銭と他の通用銭が同時に流通していたのではなく、銭不足によって以前よりも価値が上昇した通用銭（永楽通宝を含む）が永楽銭と呼ばれて流通するようになったと指摘した [川戸2017]。現在の東北地方では、豊臣秀吉が平定した後の1590年代陸奥会津で「永楽銭」が数千貫文レベルで流通していたが、これをすべて永楽通宝と考えるのは難しい。永楽銭には永楽通宝を含むが、精銭が消滅していた1590年代の会津では、永楽銭は通用銭一般を指していたと考えるべきだろう。

永楽銭という呼称は17世紀に入っても関東周辺で用いられたが、徳川政権（江戸幕府）の成立によって日本列島の流通網の統一を図るなかで、京都周辺のビタ（永楽銭＝通用銭説に従えば、永楽銭とビタは同じ銭を指す）との価値の地域格差が問題となった。実勢では米に対して永楽銭の方がビタよりも4～6倍の価値で流通していたとみられることから、江戸幕府は1608年に撰銭令を發布し、永楽銭建てになっている価格を、ビタ建てになっている価格の4倍として計算するようレートを定めた [法制史学会・石井校訂1959:3684号史料]。これは、関東で永楽銭建て表記されていた金額を4倍に引き上げることで、京都周辺のビタの価格との価値の違いを調整するためのものであった。その上で、混乱を防ぐために永楽銭の呼称を廃止し、通用銭はすべてビタの価値に統一したのである。その後ビタは京銭と呼ばれて、全国的に同一の価値で使用されるようになった。こうして銭貨の地域格差は解消されることになり、1636年の幕府による独自の銭貨（寛永通宝）発行を可能とする基盤が整った。なお、金・銀貨については17世紀初頭に江戸幕府が全国で通用する通貨を発行したが、銀貨については一部大名が独自に鑄造した「領国貨幣」が17世紀末まで流通した。また、

しばしば発生する金属貨幣（現金）不足を補うため、経済が発達して資金需要の旺盛な西日本では、独自に紙幣（札）を発行したり、帳簿上で決済する掛取引も17世紀後半以降に発達したりした〔榎本宗1977、岩橋2002、桜井・中西編2002、高木2017など〕。

5. 海域アジアの変動と貨幣—16世紀後半から17世紀前半まで(2)—

最後に、明朝の海禁緩和以後の海域アジア情勢を踏まえつつ、貨幣流通の動向についてみていきたい。

先に見た「倭寇の状況」の情勢によって、日本もまた海域アジアとの交流が活発化し、特に東南アジアとの交易が発達していった。明朝の海禁緩和後も日本との往来は禁止されたため、安全に日中間との交易を行うためには、東南アジアでの中継貿易を行うことが必要になった。この新たな可能性に注目した日本の貿易商人たちは、積極的に東南アジアへ進出し、多くの財貨を日本へもたらすことになった⁽⁸⁾。日本側が求める商品は、前代と同様に中国産の陶磁器や絹製品（生糸・絹織物）が主要品目であったが、東南アジア（主にベトナムやシャム）産の陶磁器・絹製品のほか、シャム産の鉛、フィリピンで産出される金なども日本へ多く持ち込まれるようになり、ほかに香木や香料（麝香・沈香など）も珍重された。日本からは当然ながら銀が多く持ち出されたが、ポルトガル商人によって奴隷が輸出されることも少なくなかった〔岡2010、De Sousa 2019、デ・ソウザ、岡2021〕。

銭貨については、明朝の海禁緩和によって福建から東南アジアへ大量に流出した。特に日本と同様銭貨の貨幣としての需要が歴史的に高いベトナムへの流出が多く、ベトナムにおける貨幣流通を支えることになった。ベトナムにおいても北宋銭（多くは模鑄銭）が珍重され、16世紀前半の日本と同様に隔地間の決済を担う精銭として使用された。一方、地域の商取引にはそれよりも品質の

⁽⁸⁾ 日本側の研究史把握のために簡便なものとして、〔村井2012〕がある。

劣る価値の低い銭貨が使用された。一方、16世紀末に明朝が鑄造した真鍮銭の万曆通宝も東南アジアへ流出したが、ベトナムでは忌避されて流通しなかった。ただし、ジャワでは17世紀に入って万曆通宝も使用されたとみられる〔ティエリー 2009、Hoang 2010、Von Glahn 2014、黒田2020〕。なお、この時期の日本は銭不足に悩んでおり、銭貨の流出は起こらなかつたようであるが、武器原料となる銅はマニラへと輸出されていた〔清水2012〕。一方、東南アジア経由での日本への銭貨流入もまた、無視しても良いレベルに止まったようである。

しかし17世紀に入ってイギリスやオランダが海域アジアへ進出し、当地の主導権を争って西欧諸国による紛争状態に陥ると、状況が変わり始めた。武器原料となる銅への需要が急速に上昇し、その主要産地である日本の銅への需要が高まり、多く輸出されるようになった。日本においても徳川政権（幕府）は武器原料の輸出に警戒しており、輸出の規制に乗り出すようになった。そこで西欧諸国が注目したのは、銅製品でもある日本の銭貨であった。最も積極的だったのがオランダで、1620年代後半から九州の平戸に構えた商館を通じて支配下にあった台湾へ銭貨を輸出するようになった〔永積2001、安国2016、川戸2017〕。

一方、日本では依然として生糸への需要が高く、この頃一大生産地になっていたベトナムへ日本人商人が多く買い付けに向かっていた。先述のようにベトナムでは銭貨を貨幣としていたため、現地での買い付けには銀ではなく日本から持ち出した銭貨を使用するようになった。

以上の結果、1620年代から1630年代にかけて、日本と東南アジアとの往来によって、日本の銭貨が大量に流出するようになった。海域アジアの玄関口でもある九州では特に銭不足がより深刻化したため、九州の各大名は自ら銭貨を鑄造して流通量を補填する動きも出るようになった。しかしそれも効果は小さく、1636年以降に幕府が寛永通宝を発行し、銭不足の抑止を図った。

また、キリスト教問題の浮上とともに、日本銅や銭貨の流出を警戒した幕府は、1630年代に銅のみならず銭貨の輸出も大きく規制するようになった。また、

ポルトガル商人の追放とともに、流出の原因となっていた日本商人の海外渡航を1635年に全面禁止とした。最終的には1639年にポルトガル商人を追放して日本における「鎖国」が完成したが、後にも交易が許されたオランダ東インド会社に対しても、銅輸出については厳しい規制を課すことになった。ただし17世紀後半に寛永通宝が行き渡り渡来銭が市場から徐々に排除されるようになったため、輸出用に鑄造したのもも含め渡来銭が長崎から東南アジアへ輸出されていった。しかしその量は大きくはなく、17世紀末にはそれも途絶した。すでに産出量が減少傾向になった日本銀についてもまた、輸出が徐々に規制されるようになっていった。

一方の中国では、17世紀に入って女真系の後金との戦争などによって明朝が崩壊へと向かい清朝が成立したが、この混乱のさなかに華南沿岸部における銭貨需要が急上昇した。そのため、海外から華南沿岸部へ銭貨が流入したと考えられ〔黒田1994〕、その多くは、日本（長崎）から東南アジアあるいは琉球などを経由した銭貨だった可能性がある。ただし17世紀末にはそれも縮小していったとみられる。

清朝は、成立当初、台湾をオランダから奪取して抵抗を続ける鄭成功に対抗すべく、海外交易に厳しい規制をかけた。そのため、しばらくは海域アジアでの交易が急速に冷え込むことになった。特に東南アジアにおける経済的な低落は著しく、一般に「17世紀の危機」と呼ばれる状況に陥ることになった。17世紀前半における海域アジア交易の急速な落ち込みによって、海域アジアをまたいで活発に流通した貨幣もまた、それぞれの国家内で循環する状況が形成されたと考えられる。

6. まとめ

最後に、本稿が対象とした中世日本の貨幣に関する特質についてまとめておきたい。

中世日本は、中国から持ち込まれた銭貨を唯一の貨幣とする社会が、権力の

主導ではなく、市場によって自律的に形成されたことに特徴がある。また、日本の権力は自ら貨幣の発行や統制を一切行わなかったことも際だった特徴といえるだろう。近代貨幣論では常識的でしたらあった、国家権力が貨幣発行権を独占するという理解は、もちろんそのような貨幣も多いが、歴史上に存在したすべての貨幣に当てはまるわけではないということである。このことは、国家権力が銭貨の発行を事実上放棄した15世紀後半の中国においても、経済先進地域で市場が自律的に銭貨を発行したことや、独自に銭貨を発行していたベトナムでも中国からの銭貨を積極的に受け入れたことから、国家権力のみが貨幣発行権を握っていたわけではないことは日本に限った現象ではないことが明らかである。貨幣は、国家権力が発行したものであろうとなかろうと、その権力の影響力を超えて流通することが珍しくなかった。

むしろ貨幣はそのような性質を有するからこそ、海域アジアにおける交流を支える存在となった。貿易決済通貨はおおむね貴金属である銀が担っていたが、17世紀前半の事例にみたように、銭貨もまた決済通貨として用いられることがあった。それぞれの国家権力が通貨管理を厳格にして、それが機能すれば、むしろこのような活発な交易を生み出すことは難しかったかもしれない。中国の歴代王朝ではしばしば銭貨の国外流出を禁じていたが、実際にそれを防止することは不可能だった。市場での旺盛な経済活動は、強大な国家権力をもってしても封じ込めることは難しかったということだろう。16世紀の海域アジアにおける倭寇もまた、国家権力の規制を超えた市場の経済交流の実態を示す存在だったということである。日本で中世に当たる12世紀から17世紀前半の海域アジアは、まさしく開かれた経済交流の時代であった。

15世紀後半に日本列島で内乱となり各地で地位権力（戦国大名）が成立すると、それに合わせた地域経済圏が形成され、貨幣の流通秩序も経済圏ごとに異なる状態になった。そのため地域間決済においてはしばしば銭貨の価値判定をめぐってトラブルとなった。特に中央市場としての地位を維持していた京都でその弊害が大きくなった。16世紀後半に列島が再び統一へと向かうなかで銭貨

秩序の地域格差を是正することが政治課題となり、その実行に乗り出した。同時に高額決済を担う金・銀が市場の自律性によって貨幣として流通し、権力はそれに便乗する。最終的には、江戸幕府による独自の金・銀・銭貨発行を行い、かつ17世紀後半に渡来銭使用を禁止したことで、それが達成をみる。これをもって日本では近世貨幣制度たる金・銀・銭による三貨制度の成立とし、近代的な貨幣制度の萌芽とみなしている。とはいえ、札のように国家権力の関与しない貨幣もしばしば流通するなど、市場による自律的な貨幣統制は引き続き存在していたことを指摘しておきたい。

本稿では概略的に論じたため、細かい事実を省略することになった。また、取り上げられなかった研究上重要な論点も存在する。これらの点は留意されたい。今後も貨幣流通史研究そのものの交流が国の枠組を超えて活発に交わされることを期待して筆を擱く⁽⁹⁾。

参考文献

- 足立啓二 2012 『明清中国の経済構造』、汲古書院
- 飯沼賢司 2008 「銭は銅材料となるのか—古代～中世の銅生産・流通・信仰—」、小田富士雄・平尾良光・飯沼賢司編『経筒が語る中世の世界』所収、思文閣出版
- 伊藤俊一 2021 『莊園—墾田永年私財法から応仁の乱まで』、中央公論新社
- 岩橋勝 2002 「近世の貨幣・信用」、桜井英治・中西聡編『新体系日本史12—流通経済史』所収、山川出版社
- 浦長瀬隆 2001 『中近世日本貨幣流通史—取引手段の変化と要因—』、勁草書房
- 榎本宗次 1977 『近世領国貨幣研究序説』、東洋書院
- 榎本渉 2007 『東アジア海域と日中交流—九～一四世紀』、吉川弘文館
- 大田由紀夫 1995 「12～15世紀初頭東アジアにおける銅銭の流布—日本・中

⁽⁹⁾ 本稿脱稿後、井上正夫『東アジア国際通貨と中世日本—宋銭と為替からみた経済史』（名古屋大学出版会、2022年）を得た。本稿の主題に大きく関わる成果であるが、言及できなかった。他日を期したい。

国を中心として一』、『社会経済史学』61-2

- 大田由紀夫 1997 「15・16世紀中国における錢貨流通」、『名古屋大学東洋史研究報告』21
- 大田由紀夫 2001 「中国王朝による貨幣発行と流通—明・洪武期の鈔法を中心として—」、池享編『錢貨—前近代日本の貨幣と国家』所収、青木書店
- 大田由紀夫 2010 「渡来錢と中世の経済」、荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係4—倭寇と「日本国王」』所収、吉川弘文館
- 大田由紀夫 2021 『錢踊る東シナ海—貨幣と贅沢の一五～一六世紀』、講談社
- 岡美穂子 2010 『商人と宣教師 南蛮貿易の世界』、東京大学出版会
- 川戸貴史 2008 『戦国期の貨幣と経済』、吉川弘文館
- 川戸貴史 2017 『中近世日本の貨幣流通秩序』、勉誠出版
- 川戸貴史 2020 「東アジア海域交流視域下的中世日本貨幣」、商兆琦編『全球史中的东亚世界：世界史论丛第二辑』所収、上海三聯書店（殷九洲訳）
- 川戸貴史 2021 「一五七〇年前後日本における精錢と低錢」、岩橋勝編著『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』所収、晃洋書房
- 黒田明伸 1994 『中華帝国の構造と世界経済』、名古屋大学出版会
- 黒田明伸 2020 『貨幣システムの世界史』、岩波書店
- 小葉田淳 1969 『日本貨幣流通史』、刀江書院
- 桜井英治 2017 『交換・権力・文化—ひとつの日本中世社会論』、みすず書房
- 櫻木晋一 2009 『貨幣考古学序説』、慶應義塾大学出版会
- 佐々木銀弥 1972 『中世商品流通史の研究』、法政大学出版局
- 佐藤進一・池内義資編 1957 『中世法制史料集』2、岩波書店
- 佐藤進一・百瀬今朝雄・池内義資編 1965 『中世法制史料集』3、岩波書店
- 佐藤進一・百瀬今朝雄編 2001 『中世法制史料集』5、岩波書店
- 清水有子 2012 『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考』、東京堂出版
- 鈴木敦子 2000 『日本中世社会の流通構造』、校倉書房
- 鈴木公雄 1999 『出土錢貨の研究』、東京大学出版会
- 高木久史 2010 『日本中世貨幣史論』、校倉書房
- 高木久史 2016 『通貨の日本史—無文銀錢、富本錢から電子マネーまで』、中央公論新社
- 高木久史 2017 『近世の開幕と貨幣統一—三貨制度への道程』、思文閣出版
- 檀上寛 2013 『明代海禁—朝貢システムと華夷秩序』、京都大学学術出版会

- 千枝大志 2014 「中世後期の貨幣と流通」、『岩波講座日本歴史』8所収、岩波書店
- ルシオ・デ・ソウザ, 岡美穂子 2021 『大航海時代の日本人奴隷—アジア・新大陸・ヨーロッパ 増補新版』、中央公論新社
- フランソワ・ティエリー 2009 「黎朝（一四二八～一七八九）下のベトナムにおける貨幣流通」、『出土銭貨』29（中島圭一・阿部百合子訳）
- 中島楽章 2011 「14-16世紀, 東アジア貿易秩序の変容と再編—朝貢体制から1570年システムへ—」、『社会経済史学』76-4
- 中島楽章 2012 「撰銭の世紀—一四六〇～一五六〇年代の東アジア銭貨流通—」、『史学研究』277
- 中島圭一 1992 「西と東の永楽銭」、石井進編『中世の村と流通』所収、吉川弘文館
- 中島圭一 1999 「日本の中世貨幣と国家」、歴史学研究会編『越境する貨幣』所収、青木書店
- 中島圭一 2004 「京都における「銀貨」の成立」、『国立歴史民俗博物館研究報告』113
- 永積洋子 2001 『朱印船』、吉川弘文館
- 中村翼 2013 「日元貿易期の海商と鎌倉・室町幕府—寺社造営料唐船の歴史的位置」、『ヒストリア』241
- 橋本雄 1998 「撰銭令と列島内外の銭貨流通—“銭の道”古琉球を位置づける試み—」、『出土銭貨』9
- 橋本雄 2011 『中華幻想—唐物と外交の室町時代史』、勉強出版
- 藤井讓治 2014 「近世貨幣論」、『岩波講座日本歴史』11所収、岩波書店
- 法制史学会編・石井良助校訂 1959 『徳川禁令考』前集第6、創元社
- 本多博之 2006 『戦国織豊期の貨幣と石高制』、吉川弘文館
- 本多博之 2012 「織田政権期京都の貨幣流通—石高制と基準銭「びた」の成立—」、『広島大学大学院文学研究科論集』72
- 本多博之 2015 『天下統一とシルバーラッシュ』、吉川弘文館
- 松延康隆 1989 「銭と貨幣の観念—鎌倉期における貨幣機能の変化について—」、『列島の文化史』6
- 村井章介 2012 『世界史のなかの戦国日本』、筑摩書房
- 安国良一 2016 『日本近世貨幣史の研究』、思文閣出版

- 山内晋次 2003 『奈良平安期の日本とアジア』、吉川弘文館
- 脇田晴子 1992 「物価より見た日明貿易の性格」、宮川秀一編『日本史における国家と社会』所収、思文閣出版
- De Sousa, Lúcio 2019 *The Portuguese slave trade in early modern Japan: merchants, Jesuits and Japanese, Chinese, and Korean slaves*, Brill
- Hoang Anh Tuan 2010 "Vietnamese–Japanese Diplomatic and Commercial Relations in the Seventeenth Century", *The International Academic Forum for the Next Generation Series*, Vol.1, Kansai University
- Von Glahn, Richard 2010 "Monies of Account and Monetary Transition in China, Twelfth to Fourteenth Centuries", *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 53(3)
- Von Glahn, Richard 2014 "Chinese Coin and Changes in Monetary Preferences in Maritime East Asia in the 15th-16th Centuries.", *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 57(5)

(かわと たかし 本学元教授)